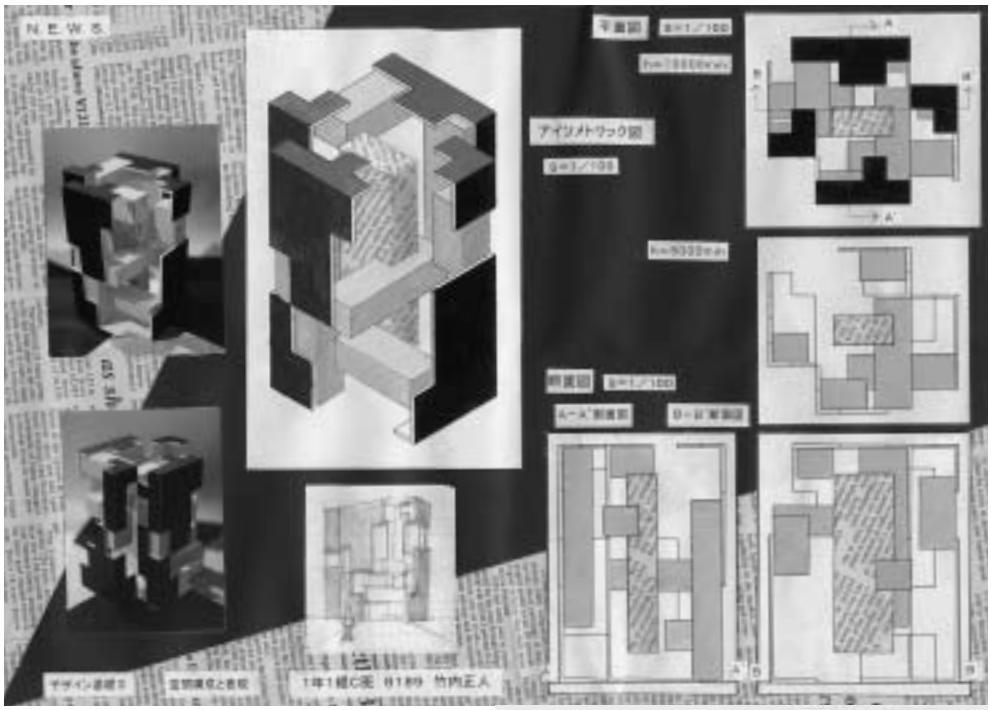
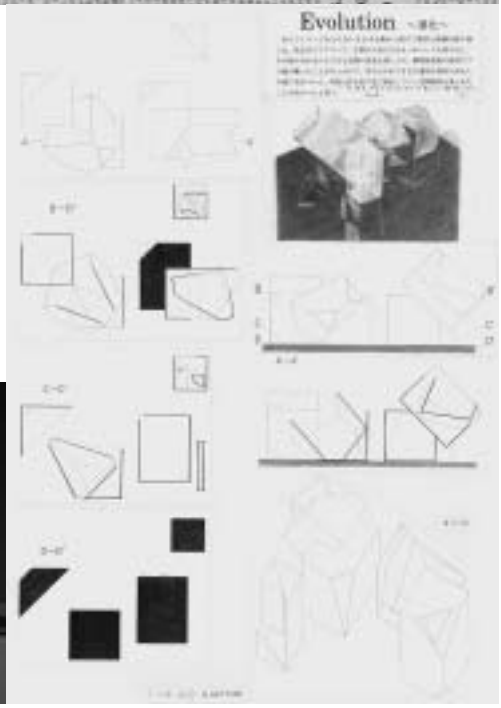
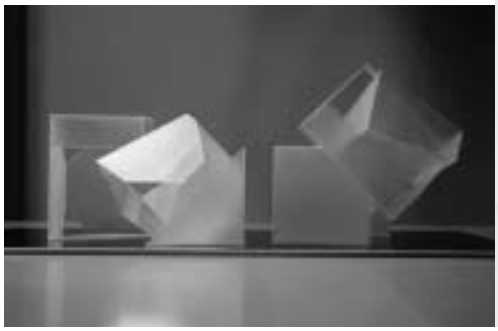


竹内　正人





服部　昌太郎

デザイン基礎Ⅱ

第２課題
空間構成と表現

１年１組

担当：
柳田　武
本杉　省三
田島　夏樹
田中　雅美
山崎　敬三

１年２組

担当：
石田　道孝
宇杉　和夫
小松　清路
白江　龍三
杉　千春

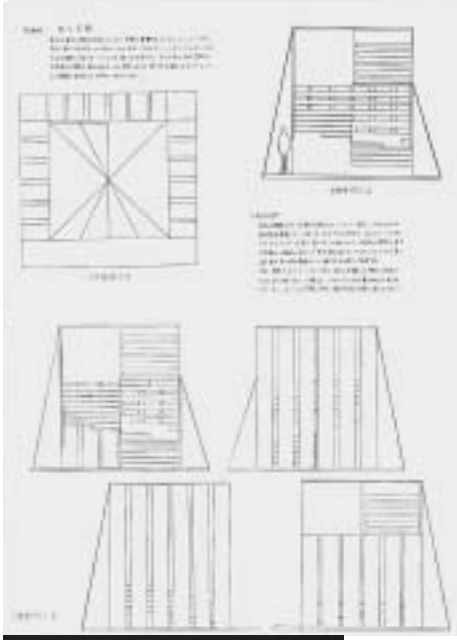
【１組】
竹内　正人
私は、この空間を構成する途中、与えられた直方体に核を置き、この核を中心として拡散する空間を考えた。そこで、核に生活の中心である情報＝新聞を採用し、空間を「情報を送受信する場」と捉えた。
直方体の内側（橙色部）は、規則的に分割され、四方に向けた媒体としての柱は、「情報の送受信」を意識させる。
一方、外側（黒色部）は、直線で自由に分割され、ずらして置くことで、間から核が覗け、断片を90度回転させたことで、外観の不規則性が楽しめる。

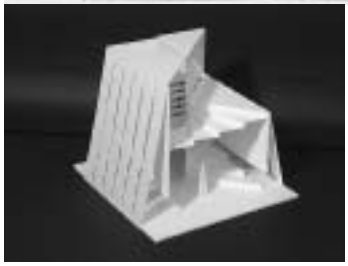
指導＝山崎　敬三
与えられた空間を分割、再構成するといった作業を行うにあたって、各自の持つ空間への直感や、自らのスタディ作業の結果を再考察し、また再び自らの感性に問いかける繰り返しがこの課題に課せられた第２のテーマだと思います。
竹内君の作品は、元の空間を解剖するかのように、あたかも、すでに存在していたかのようなパーツに解体し、一つの中心とそれらを支える多数の分割された断片から成り立っています。それは図らずも、竹内君が「情報の送受信装置」と名づけたように、なにやら単なるオブジェを超えた意味を連想させ、ダイナミックな空間の再膨張を感じさせます。
この課題が直感から出発しているとはいえ、スタディの段階で徐々に姿を表す造形に、自分なりの意味を考え、さらにそれに即した空間を追求したところにこの作品の完成度があると思います。また、模型や図面も、テーマを明確にすべく、自分なりの戦略を立てて、構成を工夫していることも、一言付け加えておくべきことでしょう。

服部　昌太郎
与えられたボリュームを４分割し４つの単体として好きな形にカットし、その後に重ね合わせたり配置を考える中で空間構成をした。模型を作る過程で何度も失敗するたびに新たな発見があり、材質も構成も進化した。作り直すたびに多様な顔を見せる空間の構成を楽しみながら作業ができたことが印象深い。
自分にとってとてもいい勉強になったので、完成形へ至る過程を作品タイトルとした。

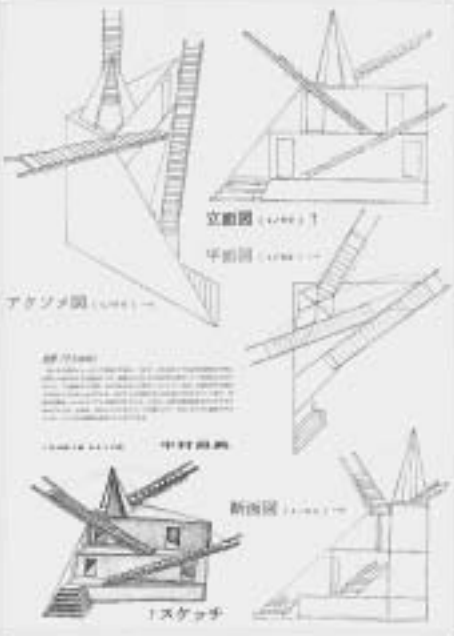
指導＝田島　夏樹
この課題では、建築を規定し成立させている様々な要件・事象の中でも、特に建築の即物的な部分と作者の感覚的な部分との呼応関係から、３次元の空間を創り、表現することが求められている。
一見無作為にも見える切断法によって分割されたピースを、特にルールも決めずに組み合わせ

高田　直美

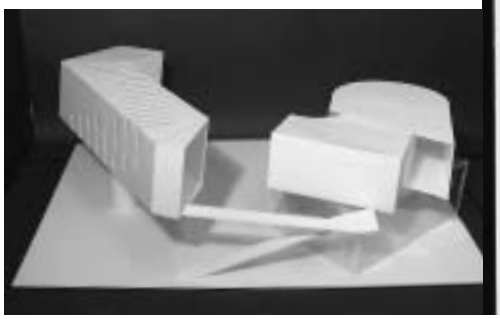


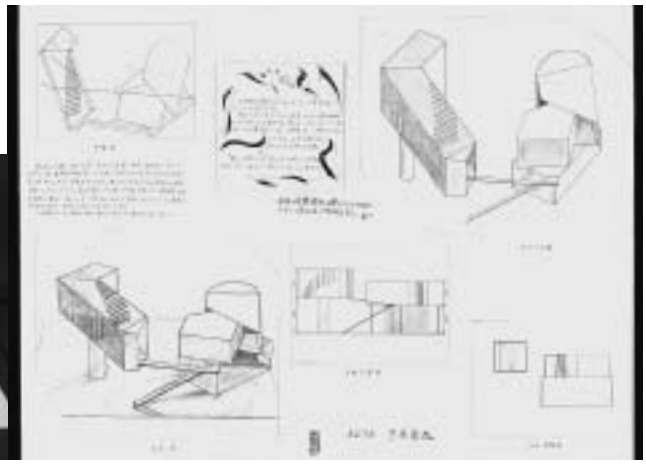


中村　昌典



三木　良太





て行く方法を採ったこの作品は、あたかもこれから崩壊するか、崩壊の過程の一場面でもあるかのようなアンバランスな緊張感を、半透明な構成の中に漂わせている。
注目すべき点はこの自由なアプローチと造形感覚が、緻密で辛抱強い作業と試行錯誤により実現していることである。作品を強く性格づける半透明の素材は、当初透明な物で考えられていたが、接着剤で汚れ曇った模型から透明／半透明を検討の上、オリジナルのスクラッチ加工を施した素材を作り出すに至った。
建築を造る時に絶えず繰り返される「頭」と「手」での作業のキャッチボールが非常に素直な形で実現できたことは、指導する側として喜ばしい限りである。

【２組】
高田　直美
光は空間を変容させ、空間は光のもとで存在する。その光は同時に影を生み出す。
この作品は、繰り返し表われる光と影をテーマに表現した。
この空間は、時間の経過や光の差し込み方によって変化する。光のあるところと光のないところを交互に連ねて、立つ位置によってそれぞれ違った空間を感じることができる。一つの空間の中に、様々な光の動きを表わした。

指導＝小松　清路
高田さんの作品は、日の光体験装置とでもいおうか、歩く行為に伴って体感できる空間をつくりだしている。壁にあけられたスリット状の隙間から光が差し込み、時間とともに変わる光と影が共振しながら空間の中を移動していく。そして、人が階段を登るという行為は、時間と空間を同時に認める行為となり、階段は、上下移動の機能から解放され、時を刻む空間としての場を確保することになる。
光格子を使った作品は数多くあったが、断面からも理解できるように、床面から遊離した垂直壁で光を遮断し、空間を分離しているものはなかった。この壁があるが故に、内部空間の光と影が明確になり、空間を領域として認識する方向を明確にしている。

中村　昌典
自分はこの模型を「空夢（そらゆめ）」と名付けた。空夢とは、実際にそうならなかった夢のことである。ここでは、叶わない「空中散歩」（つまり夢）を階段を上がることによって、多少でもその気分に浸れたらよいという思いで、それぞれ三つの長めの階段が天空に自然とつながるような場所とした。自分は、空はシンプルなイメージが強いので、それと少しでも調和できるように、シンプルな模型を作成したつもりである。

指導＝白江　龍三
空間を分割する壁やオブジェの存在が、人の心を動かす“空間”を形成する。この“空間”を感じながら、自分なりの世界をデザインする基礎的な課題である。中村君は、上に行くにつれて小さくなる段状の固まりを設け、その表面に梯子のような階段を取り付けている。階段の一方の端は、空に向けて突き出るように伸びている。階段は人が登るための装置であるが、それ以上に上へ上へと心を誘うオブジェでもある。段状の固まりには開口があって中に入ることもできるが、入る気を起こさせない。空に突き出た階段は見る者の心をカタパルトのように空中に舞い上げて、どこか不安げだが不思議な魅力のある心象空間を創り出している。

三木　良太
正面左には直方体を分割、再結合させてつくった空間。右には直方体と円とを組み合わせ、ずらし、丸みをもたせた空間が配置されている。正面のスロープが左右の空間をつなぐ。何の関連性もないような二つの空間が、スロープでつながれることの意味は大きい。スロープの存在により、正面奥に新たな空間が生まれるからだ。この作品は、一つ一つを個々の空間としてとらえるもよし、大きく一つの空間としてとらえるもよし、空間を近くで、遠くでとらえてほしい。

指導＝杉　千春
太い柱によって宙に浮いた、端部が折れ曲がったトンネル状の空間。傾いた設定と壁や天井に連続して開けられたスリットによってシャープで力強い印象をうける。一方で水平面と曲面の壁でつくられた空間は二つのパーツが噛み合ったような構成で、ずれた部分が大きな開口になっている。透明なアクリル板でつくられたヴォイドともいえる直方体にのっていることで、柔らかく軽いイメージである。この二つの対比的な空間を細いスロープが繋いでいる。
「結」とタイトルされた三木君の作品は一つ一つの空間が光の扱い、シークエンスなどにおいて特徴的な空間になっていること、そしてそれらが緩やかに連続し、心地よいリズムをもった空間構成になっていることが評価された。